

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

54

「や、やめて、義弘さん！」

先ほど浴室の中で、和樹のことを思いながら、自ら一度イッてしまったため、すでに優子の身体はイキやすくなつてしまつていた。

でも、それだけはいやだ。義弘ではなく、愛する和樹に抱かれてイキたい。

優子の抵抗を悦んでいるものと勘違いした義弘は自分も下着を脱ぐと、固く勃立したものを優子の中にいきなり入れてきた。

「い、いや！お願い！」

すでに十分感じてしまつていた優子は、義弘のものが入ってきたただけであつと言う間にイッてしまつた。

一方、優子にきつく締め付けられた義弘も

「優子、ああ、優子、気持ちいいよ！今日はどうしちやつたの!？」とあつと言う間に優子の中で果ててしまつた。

そして、その瞬間、枕元に置いていた優子の携帯が「ポーン♪」と音を立ててメールの着信を伝えた。

優子は「ごめん、シャワー浴びてくるね。」と言うと、義弘の体を押し退けて、携帯を片手にそそくさとバスルームへとむかつた。

急いで携帯を開くと案の定和樹からのメールだつた。

「優子、お風呂あがつた？大丈夫？」

慌てて返事を打つた。

「うん！あがつたよ。大丈夫。」

「僕ね、風呂の中で優子のことを想像してたら、なんというか・・・ものすごく感じてしまつたよ。」

ああ、愛しい和樹！

「私もよ。」

「えっ!?何それ？どういうこと？優子、お風呂の中でどうしたの?」

指で自分を慰めたなんてことは言えない。

「そんなこと言えないよ。」

でも、興奮している和樹をもつと興奮させてやろうと、優子はほくそえんだ。

(続く)